

Graham Greene 研究

*The Quiet American*

——Fowler 像を求めて——

宮 野 祥 子

I

*The Quiet American* は作者グレーム・グリーン<sup>(1)</sup>の1950年から1955年にわたる4回のインドシナ旅行を基礎として生れたものである。作品自体は1952年3月から1955年6月にかけて書かれている。当時ベトナムはフランスからの独立をめざす仏印戦争の最中であって、その戦局と政治状況を肌で感じた作者の体験が、いたる所に生かされて、戦争によって損われていく美しく豊穡な村や町、自然がパノラマの如く描かれ、同時にそれを背景として、自らの生き方に関わる問題として戦争という状況を受けとめねばならなかった人々の姿が鮮やかに捉えられている。主人公 Fowler もその一人であり、複雑な状況のなかで問われ、選択を迫られることによって、彼は心の未知の世界へと足を踏み出し、赤裸な自己を発見していくのである。このような Fowler の姿を通して、作者が捉えた内的に進展し変貌していく人間の姿を理解してみたいと思うのである。

作者の旅行中の具体的な観察と体験と、そしてそれらがこの作品とどのように関わっているかという点については、1973年に出版された版の序<sup>(1)</sup>にかなり詳しく述べてある。例えばサイゴンで一夜宿を共にしたアメリカ人が、デルタ地帯からサイゴンへの帰途、車中で語り続けた第三勢力発見の必要性ということが、この作品の生れる一つの契機であったことも知ることができるのである。作者はこのアメリカ人の理想を〈the great American dream〉と呼んでいる<sup>(2)</sup>。

この大きなアメリカの夢を理想の旗印として、複雑怪奇な情勢のベトナムに登場して来るのが純情な若いアメリカの青年 Alden Pyle である。作品はこの青年の出現によって彼とは対極的な存在にある自分の姿を、あらためて確認せざるを得ない立場

に追い込まれた中年のイギリス人 Thomas Fowler と、彼のベトナム女性の愛人 Phuong\* を中心として展開している。二つの争い——一方は戦争であり他方は Phuong をめぐる Fowler と Pyle の愛情の争い——を絡ませて撚り合せながら、自ら進んで現実の中に飛び込んで逆に呑み込まれてしまった Pyle と、現実との拘り合いを拒否しつつ、ついには周囲との拘りなしには真の意味で生きられないことを知っていく Fowler の姿を追っているのである。具体的には Pyle の Phuong に対する一途な微笑ましい、そして Fowler にとっては残酷な愛の告白 [第2部1章]、見張塔での長い一夜の Fowler と Pyle の語り、ベトナムの襲撃と Fowler の負傷、Pyle が命を賭けて Fowler を救うこと [第2部2章]、Phuong を Pyle に奪われてしまうこと [第3部1章]、Pyle の政治的信念を極端に追求した結果としての悲惨な自転車爆弾事件 [第3部2章]、それを見過せなかった Fowler の Pyle に対する意図されざる裏切り [第4部2章] 等が描かれている。

これらを描写する視点として作者は Fowler を一人称の語り手として設定し、さらに Pyle の死を Fowler なりに整理し、納得しようとしている現在の中に、思い出が鮮かに浮び上ってくるという〈time-shift〉の手法も合わせて用いている。<sup>(3)</sup> それで当然事実を捕える視点は Fowler の側にあり、それは Fowler というフィルターを経ているという意味で、Fowler 自身を物語ることにほかならないであろう。このような意味で〈innocence〉であるが故に危険な Pyle の姿が愛情と苦渋に満ちた思いをこめて語られているけれども、そこには Pyle が彼なりに善良であることを充分認めながらも彼を否定せねばならないと判断するに到った Fowler の姿が如実に浮び上ってきているのである。

終始一貫して不変の Pyle 像<sup>\*\*</sup> に対して、Fowler は Pyle の出現により直接間接に影響を受け、現実をあらためて認識させられ将来への選択を迫られているのである。その結果 Fowler の内部にそれ迄意識されなかった隠れていた姿が自覚されてくるように思われるのである。このような Fowler の心的状況を一つの手がかりとして、Fowler を理解するために彼の自己認識の変化とその由来と意味について本論において具体的に考察してみたいと思う。尚テキストは William Heinemann 社1960年版である。

## II

さて Pyle が姿を現わす迄は、Fowler は英国にいる妻 Helen との離婚を望みつつも彼女の同意が得られないままに、妻との苦痛な過去を忘れたかのように、Phuong との二人だけの穏やかな世界を守って満足していたのだが、Fowler には彼なりの人生に対する信条があったのである。それは人生に対して冷めて乾いた態度をとることであって、その心情は次の数行に良く表われている。

The human condition being what it was, let them fight, let them love, let them murder, I would not be involved. My fellow journalists called themselves correspondents; I preferred the title of reporter. I wrote what I saw: I took no action—even an opinion is a kind of action. (p.27)

ここに述べられている、人には勝手に争ったり、愛したり、殺したりさせておけばよい、自分には関係のないことで、それに巻き込まれたくない、というところには個人主義的な利己的な生き方を読みとることが出来よう。さらに意見や説明を加えることさえ一種の行動なのだから、通信員という呼名よりも見たままを書くだけのレポーターの方を好むという点に、現実に対する責任回避の態度を見出すこともできるであろう。このような態度の背後には人間関係に対する不信と絶望があるのではないだろうか。それは英国に残してきた妻との傷つけ合うことしか生れなかった過去の生活からの結論であるかもしれない。彼は次のように言っている。

Wouldn't we all do better not trying to understand, accepting the fact that no human being will ever understand another, not a wife a husband, a lover a mistress, nor a parent a child? Perhaps that's why men have invented God—a being capable of understanding. (p.72)

〈人間は相手を理解することは決して出来ない、妻は夫を、恋人は愛人を、親は子を理解できないという事実をそのまま認めて、理解しようと努力なんかしない方が良いのじゃないだろうか。多分だから人間は神を作り出したんだ—理解できる存在を。〉

従って Fowler は神とか信仰を必要としない人間である。彼はレポーターであって、その仕事は〈事実をさらけ出し記録すること〉(p.110)である。〈説明出来ないことを見出したことはない〉(p.110)し、〈存在しないことについて、時間を費やして書く人を俺は笑う〉(p.118)と言っているのである。彼が信じるのは〈今自分の背が壁にもたれていること〉(p.118)だけである。このような考えで生きている彼は、では日々の生活に何を望んでいるのだろうか。

I wanted a day punctuated by those quick reports that might be car-exhausts or might be grenades, I wanted to keep the sight of those silk-trousered figures moving with grace through the humid noon, I wanted Phuong, and my home had shifted its ground eight thousand miles. (p.24)

彼が望むのは一日の時間が見なれ聞き慣れた出来事で句読点を打たれるように過ぎることであり、じっとりとした真昼絹の禪子姿の女性を眺めていること、それに欲望を満足させてくれる Phuong である。つまりサイゴンを故郷としてその中に自分を埋没させ、同時に傍観者として非個性的な風景の一部に成っていることであろう。ここには激情に駆られて行動する人の姿はなく、ただ受身で瞬間の平穏を楽しみ、その瞬間が継続することだけを願う姿がある。このような生き方は彼の下す政治的判断についても良く表われている。例えば Pyle の〈ベトナム人は共産主義を望んではいないよ〉(p.119)という言葉に対して Fowler は答えている。

"They want enough rice," I said. "They don't want to be shot at. They want one day to be much the same as another. . . ." (p.119)

彼の云っている〈彼等是一日が他の一日と同じようであることを望んでいる〉という言葉は、前述の Fowler が生活に臨む姿勢と同じく、目の前の幸せをまず第一に追い求めるといふ現実的な生き方を表わしているのであろう。また捲き込まれたくないという彼の生き方は〈俺達は俺達の理念で彼等を育ててしまったのだ〉(p.120)彼等には彼等の理念が相応しく〈ここは彼等の国であって、俺達には用はないのだ〉(p.135)とか、〈これは俺の戦争じゃない〉(p.135)〈俺はレポーターで関わりはない〉(p.121)という意見となって表われてきているのである。このように Fowler は世間には冷めた態度で接し、自らは現状に満足し安心して生きていたと考えられる

のである。

さて Fowler の変化はまず〈俺は自分の主義を裏切って、パイル同様捲き込まれてしまった〉(p.240)という言葉に見出されるであろう。この *dégagé* から *engagé* への変化について、またこれに伴う自由意志による選択のもたらす苦悩について、Robert O. Evans は *Existentialism in Greene's "The Quiet American"*<sup>(4)</sup> という論文において、この作品が、特に Fowler が実存主義を応用して創作されていることを論じている。確かにこれは実存主義の発想を示すことば、生き方である。だがこれは Fowler という人物に与えられた現象的な変化の一つであって、問題はそのような行動形態をとっているということではなくて、その変化をもたらした内的認識と、決断へと駆りたてた内的必然ではないだろうか。そのことを知る一つの手がかりとして、Fowler の己に対する失望をあげることができよう。それは無知な Pyle 同様、彼自身実は多くのことを知らなかったという実感から生れてきている。説明の出来ないことは何も見い出さなかったと自分の眼の確かさと経験の豊かさを誇っていた彼が、〈俺はパイル とそんなに違っていたらどうか〉(p.243)〈俺は多くのことに盲目であった〉(p.242)と思っているのである。

さらにもう一つの手がかりとして罪の意識をあげることが出来ると考えられる。Fowler は自転車爆弾事件へと嵩じてしまった Pyle の政治的行動を中止させるべく、Heng に働きかけるのであるが、実は結果的には Pyle を死に追いやったのではないか、という不安に捕われるのである。その場面に〈We have so few ways in which to assuage the sense of guilt〉(p.240)という一文がある。これは単純に友人である Pyle を裏切ったという罪悪感と一応考えられよう。だが、その上〈only the heart decays〉という苦い思いを噛みしめている Fowler には一つの内的変化が表われていると考えられないだろうか。

Everything was as it had been before Pyle came. Rooms don't change, ornaments stand where you place them: only the heart decays.

(p. 222)

何もかも Pyle が出現する前と同じだ、部屋も移らないし、内部もそのままだ——ここには表面的には少しも変化していない生活が継続している。それは時間が句読点を打たれるように過ぎていく、という Fowler が望んでいたあの平穏な一日の繰返しであろう。しかしそのような時間の経過の中で、ただ心だけが腐敗し朽ちていくとい

う洞察には、最早以前の満足し安心していた Fowler を見出すことは出来ないであろう。心に何の痛みも感ぜず、どっぷりと現在の平穏の中に満足して浸っていることが出来なくなった彼の、自分の咎を知る不安がある。心だけが朽ちていくという、この自己の消滅を暗示する根源的な不安と苦悩は、終章の最後に描かれている Fowler のひそかな願望のなかにも良く読みとることが出来るのではないだろうか。

Everything had gone right with me since he had died, but how I  
wished there existed someone to whom I could say that I was sorry.

((p.247))

すまないと言える someone が存在していたらと、どんなに願っただろう、というこの〈someone〉は〈perhaps that 'someone' in whom he believed had acted on his behalf〉(p.240)と同じ someone であって、文脈から判断すれば、それは Unitarian である Pyle の信じている神のことである。従ってこの場合は、神が存在して欲したら、という彼の願望を表わしていることになる。だが現実には Fowler にとっての神は存在せず、虚空に向かってただ求めの声を発せざるを得ない、心を病む存在であることを彼は云い表わしているだけである。仮りに信仰を具体的に人間の心に及ぼす影響ということで推し量るならば、確かに Fowler は少しも神に接近することもなく、またいわゆる宗教的な存在であるとも云うことは出来ないであろう。

I 章で取りあげた序の中に、作者のベトナム旅行中の現地通信と思われるものが転載されている。その1953年12月31日付のところに或る夜の夢の<sup>(5)</sup>ことが記されている。奇妙にも鮮やかだというその夢<sup>(6)</sup>というの、彼が夢の中で何か議論をしていてもし主の御降誕の折何も見えない人がその場に居あわせたら興味深かろう、と云うのである。すると彼自身その人になっていて、羊飼いが跪いて祈っており、賢者が献物をしているのである。その赤茶色の長い上衣やエチオピア人であることまで記憶にあるのだが、しかし彼等は〈were praying to, offering gifts to, nothing — a blank wall〉無に向かって、空白な壁に向かって祈り、献物をしていたのである。彼は困惑してしまったが、仮りに彼等が無に向かって献物をしているとしても彼等には何に向っているのかわかっているだろうから、自分も無に向かって献物をしようと思った、というような夢である。この夢の中の何も見えない人と〈俺は多くのことに盲目であった〉と云う Fowler とが等しく、また羊飼いや賢者達の祈りや献物と Fowler の最後の願望の

言葉とが等しい、という確証は当面見当たらないが、空白な壁へ向って、虚空に向ってなされているという意味で奇妙にも共通点を見出すことができると思われるのである。

### III

II章で明らかになった Fowler の内的変化を表わしていると考えられる失望感や不安は、どこからどのようにして生じて来ているかをこの章では考察してみたいと思う。例えば次のような Fowler の体験を取りあげてみたい。

ティニンからの帰途 Fowler と Pyle はガソリン欠乏のため、道路にそって数多く建てられている見張塔の一つで一夜を過ごすことになるが、ベトナムの襲撃のため塔から脱出しなければならなくなる。その後塔はバズーカ砲で崩壊され炎上し、Fowler は負傷する。このような体験の中で Fowler はそれ迄気付かなかった自分の姿を発見していていると思われるのである。夜中11時過ぎ Fowler と Pyle を引き渡すよう呼びかける声に、塔の中でずっと見張りをしていた二人の幼いベトナム兵を残したまま Fowler と Pyle は塔を脱出しようとする。Fowler は暗闇へ向って降ろされている唯一の出入口である梯子を降りようとするのであるが、その時彼は人間しか登れないのに〈何が梯子を登ってくる、何も聞えない、だけど梯子が揺れている〉と一瞬恐怖にかられて錯覚するのである。

I don't know why I thought of it as something, that silent stealthy approach. Only a man could climb a ladder, and yet I couldn't think of it as a man like myself—it was as though an animal were moving in to kill, very quietly and certainly with the remorselessness of another kind of creation. The ladder shook and shook and I imagined I saw its eyes glaring upwards. (p.136)

これはまさに現実に死に直面した時の Fowler の恐怖の有様であって、情容赦のない得体の知れない動物が目をぎらぎら光らせて下から見上げている、というのは彼の恐怖の投影像であろう。しかし彼はこれ迄死というものに憧れてきたのである。ベトナムに来たのも、こんな風に見張塔にでも居る時に大砲で一瞬の間に死ぬることを願

っていたからである。(だからこそ東洋にやって来たのだ、死がいつも側にいるからだ)  
(p.133)と彼はその夜も Pyle に語っている。彼のこの死への憧れには明確な理由  
があった。

A chance of death? Why should I want to die when Phuong slept  
beside me every night? But I know the answer to that question.  
From childhood I had never believed in permanence, and yet I had  
longed for it. Always I was afraid of losing happiness. This month,  
next year, Phuong would leave me. If not next year, in three  
years. Death was the only absolute value in my world. Lose life and  
one would lose nothing again for ever. (pp. 49-50)

生命を失えば人は再び何も失うことはない、ここには現在の自分に対する激しい執着  
心つまり現実肯定と、それと裏表をなしている自己消滅つまり現実否定への願望があらわ  
れていると考えられる。これは、永久不変を信じなかったのにそれを願望した、という彼  
の自己矛盾とも云うべき、現存在の永続性に対する激しい希求を表わしているとも云  
えるであろう。だから、死は俺の世界で唯一絶体的な価値だとか、少し後で述べてい  
る〈死は神よりもずっと確実だ〉(p.50)という考えも、肉体の消滅を伴った具体的  
な死を伝えているのではないのであろう。現実の幸福が永久に存続することはなく、  
いつか変化するということが恐ろしく耐え難いが故に、そしてその不安を断つことが  
出来る故に死を求めているのである。いわば阿片のように不安を慰め和らげてくれる  
死が考えられているのである。従って彼は死に憧れてはいるけれど自殺希望者では  
なく、ただ理性的な観念の世界における死が求められていたのである。だから前述の  
眩暈のするような現実の死に対する恐怖心は自分に対する考えを一変してしまうので  
ある。それは〈俺が震えているから梯子が揺れているのがわからない程ばかな臆病者  
だった〉(p.136)という言葉になって表われている。Fowler は〈神経が図太くて想  
像力に欠けているから事実の冷静な観察者であるレポーターに相応しい〉(p.137)と  
思っていたのに、実際は冷静さに欠け幻想とも云うべき程の想像力に富む自分を発見  
したのである。

もう一つの発見は彼が周囲との相互関係を抜きにしては存在し得ないという発見で  
あって、それは彼と塔に残されたベトナム兵との間に生じた断つことのできない関係

を認識することでもあったのである。Fowler は最初彼等のことを〈この二人を幸せにしてやりたい、それだけだ。彼等が夜の暗闇で怯えながら起きていなくてもよくなるよう願うよ〉(p.122)と同情はしていた。だがそれは彼とは全く無関係な存在であり、責任を感じなくてもよい人間に対する同情であった。ところが Fowler と Pyle が居たために攻撃されて、一人は生命を失い、もう一人は苦痛と恐怖に怯えて泣いているのである。その声を聞いた時 Fowler は彼等に対する自分の責任を痛感するのである。

I was responsible for that voice crying in the dark: I had prided myself on detachment, on not belonging to this war, but those wounds had been inflicted by me just as though I had used the sten, as Pyle had wanted to do. (p.145)

〈俺は暗がり泣いているあの声に責任がある。俺は自分が超然としていられることを、この戦争につながりが無いことを誇りにしていた。だがまるで俺がステン銃を使ったみたいに、それをパイルは使いたがったのだが、俺のせいで負傷したではないか。〉

それで彼は自分の傷の痛みを堪えて、その声の方へ動こうとするのである。それが彼に出来る唯一のことであるから。しかし彼は自分のその心の動きが、実は非常に自己中心的な発想に基づいていることも知っていて、自分を次のように判断している。

I know myself, and I know the depth of my selfishness. I cannot be at ease (and to be at ease is my chief wish) if someone else is in pain, visibly or audibly or tactually. Sometimes this is mistaken by the innocent for unselfishness, . . . (p.146)

この判断によれば彼の心の動きに二つの傾向を認めることができる。彼は肉体的な苦痛よりも彼にとってはもっと切実な心の安らかさをひたすら望むが故に、心を背立たせる他人の苦痛の方が自身の肉体的な苦痛よりもより耐え難いと云うのである。無邪気な人間が時に〈unselfishness〉だと誤解するけれど彼は自分がそのような立派な心を持つ人間ではなく、自己中心的な人間であることを良く弁えているのである。この冷静で理性的な自己分析を一つの傾向とするならば、一方ではこの理性的判断に支え

られている彼が、実は苦痛に対して敏感であり、〈心安らかである〉という言葉に表わされているような情感をその行動の契機としていることである。これらの理性的客観的判断力と主情的な傾向とは彼と Pyle との関係においても如実に表われているようである。

さて Fowler と Pyle の性格が両極的立場にあることはすでに明らかにされている。例えば、Francis L. Kunkel は両者がお互いに引き立て役を果しており、Fowler は人間の出来事に個人的に拘り合いを持たなかった男の悲劇であり、Pyle はあまりにも拘り合いすぎた男の悲劇であるとしている。さらに愛においては Fowler は経験を Pyle は無邪気を、政治的には Fowler はヨーロッパを Pyle はアメリカを表わすと述べている<sup>(7)</sup>。また Miriam Allot は H. James 流の旧世界と新世界を両者が表わすとし<sup>(8)</sup>、Terry Eagleton は Pyle の表わす〈the destructive ruthlessness of innocence and principled action〉と Fowler の〈the corrupting guilt of pragmatic humanism〉との闘争であるとし、Pyle は〈strong, innocent, decisive, so dangerous〉であり Fowler は〈weak, cynical, compromised, corrupted〉であると述べている<sup>(9)</sup>。だが Fowler にとっては、Pyle は自分がすでに失った純情で善良な過去の姿を映し出す鏡であり、彼の善良さ、無邪気さの故に Fowler は Pyle を守ってやりたいという本能的な思いに駆られたりするのである。しかし同時に彼は Pyle のもっている本質〈innocence〉が全面的に肯定されるべきではないことに気付いているのである。

... innocence is like a dumb leper who has lost his bell, wandering the world, meaning no harm. (p. 40)

〈無邪気とは何の害も及ぼす気もなしに、世界をうろつき廻る鈴を失った癩者のようだ。〉

ここには〈innocence〉に内在する否定的な二面が云い表わされているであろう。この世から排除されねばならない癩者という意味において、本質的に否定されるべきことであること、そして自分が否定されるべき立場にあることについて、無知、無自覚であるという意味において、全く罪の意識を欠いていることである。それは鈴を失った状態で表わされているように周囲の者には非常に迷惑な存在である。Pyle に形象されたこのような意味を具体的に表わしていると思われるのが自転車爆弾事件の場面である。The 将軍と手を組んでなされたこの爆発事件は共産主義から東洋を守り、

第三勢力を盛りたてようという意図をもっていたものであったが、穏やかな市中を一瞬にして修羅場に変え、罪のない大勢の市民を殺傷してしまったのである。この悲惨な現場を目撃した Fowler は激しい衝撃を受けた。そしてまた Pyle も同様であったが、その現場に立ちながら Pyle は自分が致命的に無知であることを云い表わしているのである。

Pyle said, "It's awful." He looked at the wet on his shoes and said in a sick voice, "What's that?"

"Blood," I said, "Haven't you ever seen it before?"

He said, "I must get them cleaned before I see the Minister."

(p.212)

ここで非常に効果的に用いられている、靴が血で汚れているのを見て云った Pyle の言葉、公使に会う前に靴をきれいにしてもらわなくてはいけないは、元来悪意を内に秘めていない (innocence) に内在する自己本位を示しているのであろう。自らの正しさと善意を信じて疑わない為に、他人を疑うことを知らず、そしてまた自らが周囲に及ぼす害を識ることが出来ないために、その責任も識ることはないのである。だから眼前の苦痛、苦悩、悲しみに心を乱されることはないのである。この Pyle の言葉を聞いて Fowler は〈君は右靴にたつぷりと第三勢力と民族デモクラシーを塗りつけたんだ〉(p.213) と語るのであるが、また他方では次のようにも思うのである。

... and I thought, 'What's the good? he'll always be innocent, you can't blame the innocent, they are always guiltless. All you can do is control them or eliminate them. Innocence is a kind of insanity.' (p.213)

〈俺は思った「云って何になる？彼はいつでも無邪気なのだろう、無邪気な人間を非難できない、彼等はいつも罪がないのだから。出来ることといえば彼等を支配するか排除するしかない。無邪気は一種の狂気なのだ」〉

このように判断した Fowler は共産勢力の商人である Heng に会いに出かけたのである。彼の事務所で Fowler は〈俺に何か出来ることはないかね。彼をやめさせなくてはいけない〉(p.226) と問いかけるのであるが、この時彼にこのような言葉を語せたのは、戦争に対する憎しみであろう。彼は爆発で死んだ赤坊を抱いた母親の姿を

心から消すことが出来なかったのである。

“ . . . Heng, there was a woman there whose baby—she kept it covered under her straw hat. I can't get it out of my head. And there was another in Phat Diem.” (p.226)

ここに述べられているもう一人の母親とは、彼が戦場視察に出かけた時目撃した母と子のことである。この母と子の姿を見たことは作者自身にとっても現実の、非常に強烈な印象を受けた経験であったように<sup>(10)</sup>序にも記されているが、作品においては次のように描かれている。

. . . in a narrow ditch . . . a woman and a small boy. They were clearly dead: a small neat clot of blood on the woman's forehead, and the child might have been sleeping. He was about six years old and he lay like an embryo in the womb with his little knees drawn up. . . . He was wearing a holy medal round his neck, and I said to myself, 'The juju doesn't work.' There was a gnawed piece of loaf under his body. I thought, 'I hate war.' (pp. 62-63)

まるで生きてのような母親、かじりかけのパン、胎児のように丸まった子供、胸の holy medal 等が、俺は戦争を憎む、という激しい怒りを感じさせたのであろう。この母と子の姿は、爆発現場で地面に坐って膝に抱いた赤坊の死体に黙ってそっと麦桿帽子をかけている母親の姿と重って、Fowler を行動へと駆りたてたのだと考えられるのである。この怒りが彼を Heng に会わせ、Pyle をやめさせねばならぬと決心させ、結果として〈状況が許すかぎり穏やかに行動すると約束します〉(p.227)、という Heng の言葉に不安を感じながらも Pyle を誘い出すことを取り決めさせたのであった。だが彼は迷いに迷うのである。しかし誘い出すための食事の約束をするために Pyle と会った Fowler は Pyle が朝の事件で心を痛める様子もなく、またその事件の残酷さも理解していないのを知って、彼と話すことは〈絶望的な議論だ〉(p.230)と諦めたのであった。そして Heng との打ち合せ通りに窓辺の残光をたよりに本を開くという決定的な行動を為したのである。その後幾度もためらい、心に痛みを覚えながら、Fowler は約束を中止するチャンスがあるにもかかわらず、また Pyle

に真相を打ち明けもせず、結局約束をしたまま別れてしまうのである。Pyle を送り出しながら、Fowler は云いようなない疲労を感じて次のように思っている。

I handed back the decision to that somebody in whom I didn't believe: you can intervene if you want to: a telegram on his desk: a message from the Minister. You cannot exist unless you have the power to alter the future. (p.236)

〈俺は自分の信じていないあの誰かに決定を委ねた。お望みならあなたは邪魔が出来るのですよ。机の上に一通の電報を置くとか、公使からの伝言とかで。未来を変更する力がなければあなたは存在しているはずがない。〉

この最終的な放棄の態度は、一瞬 Fowler が全ては大いなる御心のままに未来が開けるといふ楽天的思想の持主であるかのような印象を与える。しかし信じていない誰かに委せることは無に賭けをするようなもので、そのことから何もかも期待することは出来ないであろう。

#### IV

Fowler 像を知るための一つの手がかりとして彼の内部に生じた変化を以上のような考察によって明らかにしようとしたのであるが、それは客観性と理性に基づいて物事を判断し、処理していくことだけで満足していた人間が理性だけでは解決され得ないのだという発見をなしたことであって、人間的であろうとすれば、その行動の契機に〈a moment of emotion〉(p.198)を認めざるを得ないということである。客観的な判断を正しいと信じつつ行動し、同時にその行動の契機として他者に対する責任と咎とが表裏をなす関係存在としての自我を認めざるを得ないという意味で、〈自分のしたことが正当でありながら誤っていたことを知った<sup>(1)</sup>〉のであると云うことができよう。その結果〈心安らかであること〉(p.146)という願いを最早永久に手に入れることは出来ないで、心が病み朽ちていくという不安を意識している素裸の人間が出現しているのである。

終章で Fowler は Pyle の死によって再び *Phuong* を得、妻との離婚も可能になり、*Phuong* との正式の結婚が予告されている。表面的には彼の希望通りの穏やかな

生活が再び始まるようであるけれど、Phuong に向かって「同じだね」と俺はうそをついた、「一年前と」（p.245）と云う Fowler には一年前はすっかり違ってしまっただけという自己認識がある。二度と以前の心安らかな満足は得られなくなった苦悩する心がある。この Fowler の現実を Miriam Allot は〈後悔で汚れた幸福〉<sup>(12)</sup>と云い、Robert O. Evans は Fowler の苦悩は実存主義者にとっては〈dreadful freedom〉 恐ろしい自由に伴う代価というべき苦悩であることを、Fowler が認識していると論じている。<sup>(13)</sup>また David Pryce-Jones は Fowler の語りかける〈someone〉が神であることを認めつつも、Fowler が宗教的な考え方に裏打ちされていない道徳的窮地に立つ人間だと述べている。確かにここで認められることは Fowler が心の痛みを知る、自分の咎を知る、それ故苦悩する人間へと内的変貌をとげて、不安な人間へと転落したことであろう。自らが不安であることに開眼したという意味でこれはいわゆるアダムの「幸運な墮落」<sup>(15)</sup>のケースに一見類似している。しかし幸運へと転回せしめる〈someone〉への確信に欠けているという意味で、Fowler はアダムではなく、彼は不安の直中に取り残されて、あてのない呼びかけを続け、〈われわれには希望がない。それでもわれわれは希望することをやめない〉<sup>(16)</sup>という悲劇的な人間存在を表わしているのではないだろうか。Fowler 像の一側面をこのように捉えることも出来るのではないかと考えられるのである。

\* \* \* \* \*

- \* Phuong に与えられた性格、役割等について、全く受身であること、そのイメージの自然と密着していることなどについて、いずれ稿を改めて考察してみたいと思う。
- \*\* Pyle はその与えられた性格 〈innocence〉上、アダム像に本質的に類似している。しかし性格上の発展変化が明確でなく人間的陰影に欠けており、「幸運な墮落」を験験しない存在として形象されていると思われる。これは興味深い点であると考えられるので、作者の innocence 観を知るためにも、稿を改めて考察してみたいと思う。

註1 *The Quiet American*, William Heinemann & The Bodley Head, 1973

註2 同上, Introduction, p. xvii, p. xix

- 註3 手法上の特徴について作者は序において、第一人称の語り手と〈time-shift〉とを用いたと述べ、語り手としてジャーナリストを選んだのは〈*rapportage*〉に相応しいからだと云っている。このことが単に Fowler の Pyle に対する行動が秘かであることを指しているのか、或は読者に対する語り口としての秘かな告口という作品全体の構成にかかわることなのであるか定かでない。 p. xix
- 註4 *Modern Fiction Studies*, 1957, *Autumn*
- 註5 *A Sort of Life* (The Bodley Head, 1971, p. 30) の中で作者は夢が自分にとっていつも重要であったし、二篇の長編小説と幾つかの短篇小説は夢から出て来たと述べている。
- 註6 註2に同じ, pp. xxii-xxiii
- 註7 *The Labyrinthine Ways of Graham Greene*, Sheed & Ward, 1959, pp. 150-151
- 註8 *Graham Greene*, edited by Robert O. Evans, University of Kentucky Press, 1963, p. 191
- 註9 *Exiles and Émigrés*, Schocken Books, 1972, p. 125
- 註10 註2に同じ, p. xix
- 註11 悲劇の探究, R. B. シューウォール, 上野直藏監訳, 南雲堂, 1972, p. 37
- 註12 註7に同じ, p. 199
- 註13 註4に同じ
- 註14 *Graham Greene*, Oliver and Boyd, 1973, p. 93
- 註15 アメリカのアダム, R. W. B. ルーイス, 斎藤 光訳, 研究社, 1973 第3章
- 註16 註10に同じ, p. 234

・なお、本文中のテキストの訳文については、田中西二郎訳「おとなしいアメリカ人」(早川書房・昭和44)を参照いたしました。